

管理業務をととした渉成園の保全と復元

The Preservation and Restoration of Garden-landscape in a Cultural Property through its Maintenance

寺内 桂子* 加藤 大貴* 加藤 友規*

Keiko TERAUCHI* Daiiki KATO* Tomoki KATO*

1. はじめに

史蹟名勝など文化財に指定された庭園の保全において、年々の管理業務は少なからず重要な位置づけにあるといえる。地形や石、石造美術品の現状変更はまずありえなくとも、植栽の状況は管理次第で短期のうちに変化し、それが長期にわたると庭園の景観にも大きく影響を及ぼすことはいうまでもない。またひとたび何らかの理由で庭園の荒廃期間ができ、その間に景観のまとまりが失われたような場合、どのような景観を取り戻すべきであるかの判断は容易ではない。建築物とは異なり、指図による寸法通りの再建がたちまち可能とはいえない庭園景観の保全や復元は、生き物材料を含め庭園環境の微妙なバランスに、たゆまぬ働きかけの年月の積み重ねによってはじめて可能となる。その間、終始一貫した庭園のイメージを抱きつづけて管理にあたるには、信頼にたる視覚史料

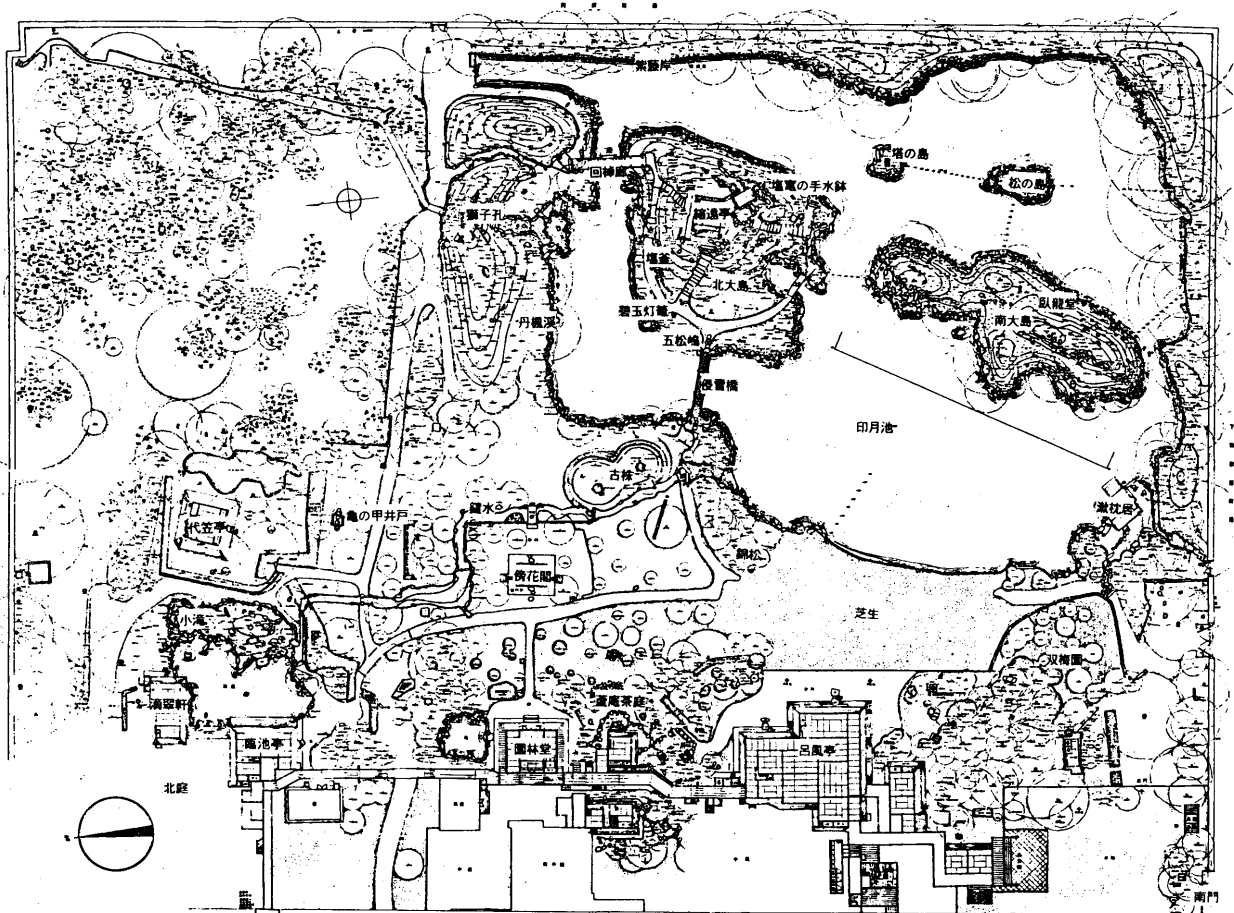
や文献史料にもとづく景観像の獲得が必要である。また、例えば周囲のビルの高層化が思わぬ景観破壊を引き起こすなど、昨今の文化財庭園を取り巻く環境も厳しいものがあり、このような新しく起こされた事態にも、できる限り対処してゆく必要がある。

今回は、昭和 47 (1967) 年より約 30 年間にわたり管理にあたってきた国の史蹟名勝庭園における管理業務をととした景観の保全および復元の取り組みについて報告する。以下に(1)庭園の景観像の模索、(2)管理方針の決定のそれぞれについて事例を示しつつ述べてゆきたい。

2. 本論

(1) 庭園の景観像の探求

(i) 庭園の概要



縮尺 1:1000

図-1 渉成園平面図

(日本庭園史体系の実測図に加筆)

* 植彌加藤造園株式会社

* Ueyakato Landscape Co.,Ltd.

涉成園は、東本願寺の別邸として通称「^{きこく}積穀邸」の名で知られる。

京都市下京区、東本願寺の東方 200m に位置し、面積は約 35,200 m² (約 10,600 坪)。徳川家康から寄進された地に現在の東本願寺が分派した後、寛永 18 (1641) 年にその東方の地が徳川家光より重ねて寄進された。ここを当時の門主宣如上人が隠棲の地として整備したのが涉成園の始まりとされる。以後、歴代門主が移り住んだ。昭和 11 年 12 月に敷地全体が国の史蹟名勝に指定された。

(ii) 涉成園の変遷

庭園は江戸初期の変則的な回遊式庭園で、池に島を浮かべ、書院からの雄大な景色を楽しむもので、全体の規模や地割などが基本的に今日の姿と同じであったことが昭和 27 年以降の森蘊、村岡正ほかの庭園研究により解明されている。今日の姿と決定的に異なるのは、現在「北大島」と呼ばれる部分が当初は地続きの出島の形をとっていたこと、安永 9 (1780) 年刊の『都名所図会』で「小堀遠州の好みなり」と紹介される臨池殿の部分が、明治の改修で適翠軒・臨池亭の二亭のかたちで整備され、臨池殿の築地塀のあったあたりに印月池へ注ぎ込む鍵水が新たに造られたことぐらいであるとされる。建物や庭園には宣如上人の意向や好みが反映されたとみられるが、ここで上人を助けて構想にあたったのは江戸初期の文人として名高い石川丈山と伝えられる。その後、涉成園は創設以来約 350 年度重なる火災にもよく耐え、その基本的な構成に大きな変更を加えることなくよく守られてきた。

(iii) 庭園の管理状態の変遷

さて創設以来、涉成園の庭園部分がさして大きな変更もなく大切に受け継がれてきたことは先に述べたとおりであるが、管理状態がどのようなものであったかについては、普請の記録が豊富に残される建築物とは異なり、記録に乏しい。見聞記や絵図などの表現から推測するしかない。

①『涉成園古絵図衝立』…江戸初期

鑑定により江戸初期すなわち創設当時の様子をかなり写実的に示すとされる『涉成園古絵図衝立』には、池を取り巻くようにマツが配され、現在と比べて各段に樹木の少ない庭園の様子が描き込まれている。現在はムクノキ・クスノキ・アラカシなどが 15m 以上に生育して威容を誇っている南大島も元来は松島であったようである。また池の中に浮かぶ小島「松の島」には現在マツはないが、古絵図にはやはり美しいマツの姿が見られる。さらに、印月池東側及び南側の敷地境界との間は元来はマツの植込みであったのが、現在は 15m 以上の広葉樹が繁茂して内と外を区切っている。かつてはマツの枝越しに東山を借景として取り込んでいたものである。また今日マツが多く見られる傍花閣南側にも当初より数多く植えられていたことがわかる。傍花閣は現在の姿と変わらず周りにはサクラが配されていたことがわかるし、紫藤岸の藤棚も現在の位置にあった。

②『都名所図会』…安永 9 (1780) 年

時代を下って『都名所図会』の挿絵を見ると、ここにも依然すっきりと手入れの行き届いたマツの点在する庭園の様子を見とることができる。全体の庭園の趣は『涉成園古絵図衝立』と相通ずるものがある。しかし、ここでは広葉樹の描き方にもかなりの力点が置かれており、この点が『…古絵図衝立』との相違点といえることができる。

これが画風の相違によるものか、現実には創設時より広葉樹が増えたのかについてはなお検討の必要がある。いずれにしても、この頃までは涉成園はよく手入れの行き届いたマツ主体の庭園であったことは間違いない。また、この頃から「積穀邸」の俗称で親しまれるようになった由縁となるカラタチの生垣が、築地塀の外を二重に取り巻く様子も克明に描かれている。

③『涉成園記』文政 10 (1827) 年

ところが江戸後期に入り、頼山陽の『涉成園記』をみると「而縮遠之亭昔嘗見東山諸峰所以得名而今則園中樹木蓊鬱而已」あるいは「築亭園中央。望見東山頂。於今二百年。唯見園樹影。殘山與乘水。何必縮遠景。」とあり、北側の島の頂に位置する茶席「縮遠亭」から創設当初は名の通り東山三十六峰が一望のもとであったのに、この頃までにはすでに樹木が繁茂して眺望を遮っていたことがわかる。この間に、面積が広いため庭の手入れも思うにまかせず樹木が伸び放題となり、雑木や雑草の繁茂の著しい時期があったことが伺える。その時期に樹林化した外周部分は二度と本来のマツを主体とした景色に戻ることはなかったと推測される。

さらに同じく『涉成園記』のなかに臥龍堂について「神力制大龍。臥之池水中。千歳化巖石。髯角翠森々。其舌為洪鐘。時々猶一吟」という表現があり当時の南大島の様子を伺うことができる。「森々」という表現であらわされ、龍の髯になぞらえられるほどの大きな樹木が緑濃く成長していたことから、当時すでに松島の面影は失われており、より現在の姿に近い状態になっていたことがわかる。

④明治期

幕末の混乱期に二度の大火を経て、ようやく明治に入ると、東本願寺本山が今日の姿に再建されるとともに、涉成園も復興しほぼ現在の姿となった。この時期、庭園にとって少なからぬ影響を与えた



図-2 都名所図絵

のは、池の水源がそれまでの高瀬川から琵琶湖疏水に変わったことである。これは、本願寺の防火用水計画の一環であり、明治に入って整備された琵琶湖から京都への運河(疏水)に取水口を設け、専用の鉄管で市中を横断して導水した。この時期、庭園の北西部の臨池殿のあたりを改修して新たに滴翠軒・臨池亭が整備されたのも、水源の変更に伴い疏水の水を新たに滴翠軒横の滝から池に落とすかたちに改修する必要があったためとみられる。これにより滴翠・臨池の両亭が張り出す小さな池から流れ出す水が新設の鍾水の流れくんだり、傍花閣の横で印月池に注ぎ込む現在の形が完成した。一方、印月池の北東に注ぎ込んでいた高瀬川からの水源は廃止された。このことは池水の循環を大きく変え、今日に至るまで水質などに少なからぬ影響を与えている。

⑤大正～昭和期

大正時代には、敷地東側の河原町通りの拡張が行われたが幸い涉成園の敷地には影響がなかった。

昭和に入ってから、当社の聞き伝えるところによると、昭和20年頃の門主(前々代)が庭好きで、出入りの植木屋、稲垣小兵衛達を使って涉成園の手入れを怠らなかつたとのこと。稲垣は戦前を通して管理を任せきっちりと仕事をしていらした。昭和28年には、火災があり一部の建築物が焼けたが間もなく復興した。

戦後は庭園の管理が東本願寺の職員ひとりに任せられる時期が長く続き、時折業者が応援に出向かたちとなった。しかし、このような体制で広大な面積を有する庭園を管理することは到底おぼつかず、この時期の涉成園は「むじやむじや」の状態であった。村岡も、樹木が伸び放題となり雑木・雑草の繁茂の著しい時期について述べている。昭和42年に、ようやく業者による年間管理体制に移行し、この時から植彌加藤造園株式会社による管理が始まり今日まで継続してきた。

戦後の涉成園で特筆すべきは、昭和50年～53年にかけて文化庁の補助により保存修理、環境整備事業が行われたことである。それまでに池底の粘土の老朽化こともなう漏水が著しくなり、昭和40年代から徐々に水が溜まらなくなって、ついには干上がってしまった。そこで庭園文化研究所の設計監理のもと池全体の浚渫、深草産粘土の打ち直し、護岸石組の修復、乱杭の取替、不要樹の伐木、庭木の整枝剪定、中島の塔の据え直し、藤棚復元などが行われた。

(iv)涉成園に関する庭園史研究

庭園については一般的にも直接その変遷に触れた史料は少ないものであるが、涉成園も昭和に入って複数の庭園研究者による古絵図の発見があるまでは、長らく『都名所図会』など部分が大幅にデフォルメされた我国独特の画法による風景図から様子を窺い知るしか方法がなく正確なことは容易に知れなかった。涉成園の見聞記はいくつかあり、なかでも文政10(1827)年に編まれた漢文調の頼山陽の『涉成園記』が最も世に知られ今日に至るまで涉成園論の準拠となってきた。視覚史料としては『都名所図会』(1780年刊)、『都林泉名所図会』(1799年刊)、丸山応瑞の『六条枳殻苑写図』、岸連山の『涉成園全景図』などが知られてきた。

その後、昭和に入って庭園史研究が盛り上がりを見せ、重森三玲、森蘊、村岡正といった庭園研究者が涉成園の考証にも大きく貢

献した。特に、昭和27年に『涉成園古絵図衝立』、翌28年に『枳殻邸安政度総図』と絵図類の発見が相次いだことにより、庭園全体ならびに頼山陽の「涉成園十三景」などの各部分の位置の同定が可能となり、具体的な形状を比較検討できるようになった意味は大きい。また、この時期、庭園の実測も盛んに行われるようになった。戦前には京都大学農学部造園学研究室が300分の1の実測図(平面図)を作成し、昭和28年に村岡の監修のもと同研究室学生による改訂版が作成された。最新の実測は昭和47～48年にかけて重森三玲・完途の監修により行われ、ここには樹木についても樹種や位置、樹幹の大きさが克明に記されている。このような実測図が後世の庭園管理者にとって大いに役立つものであることはいうまでもない。

(2)管理方針の決定

以上のように各種資料を検査してみると、宣如上人ならびに石川丈山が創設当初抱いたであろう庭園像が、今日の涉成園に約350年間変わることなく受け継がれてきたことがわかる。しかし、その一方でマツを主とした初期の景観が樹木の生育繁茂によりある時点で失われてしまったこともまた惜まれる。さらに現状の景観は、昭和50年代に行われた保存修理・環境整備事業により呈示された延長線上にあり、現代の庭園を取り巻く状況のなかで十分な妥当性を有することはいうまでもない。しかし現状の庭園には30年間管理に携わってなお拭い去れない一時期の荒廃の名残が依然感じられるのもまた事実であり、今後さらに継続してまとまりのある景観を求めて管理にあたる必要がある。さらに史料を十分に検討した上で復元が妥当であると考えられるものは積極的に提案してゆくことも大切であるとする。一方で周囲のマンションなどが軒並み高層化してゆき景観が破壊されてゆく昨今、必要な対策も講じる必要がある。

このような考え方にに基づき庭園各所の管理方針を立て、これにその年々の気象条件などを考慮のうえ作業内容を決定してきた。以下にいくつかの例を示す。

①カラタチの生垣の復元

カラタチは「枳殻邸」の名の起源であり、江戸時代中期以降のある時期に築地塀の外側を二重に取り巻く形で設けられていた生垣に使われていた。『都名所図会』に詳しい。今日では、南門の周辺にわずかに残るばかりで昔日の面影はない。『都名所図会』のように外周をぐるりと取り巻くには敷地に余裕がないため、敷地内の高石垣に沿って往時の姿を復元する方法を模索中である。

② 外周樹林の管理

ここは元来、池と築地塀にはさまれる土手にマツが入念に手入れを施され景色を形づくっていた場所であるが、江戸後期にはすでに鬱蒼とした樹林と化していた。復元の本筋としては雑木を伐採して東山の借景を取り戻すことも考えられるが、今日では河原町通り東側の建築物が軒並み高層化して景観破壊の被害が著しいので、むしろ障壁としての樹林は必要不可欠とすらいえる。幸い、呂風亭の大座敷からの東山頂上の眺望は今のところ守られているため、この部分の樹木の高さを低く抑えることを除いては、外周樹林はむしろでき得る限り高くすることとする。

③松の島の復元

現在「松の島」にマツはないが、『涉成園古絵図衝立』では美しい

一本の松が小島に生育している様子が描かれている。名前の由来であるマツの植栽を提案中である。

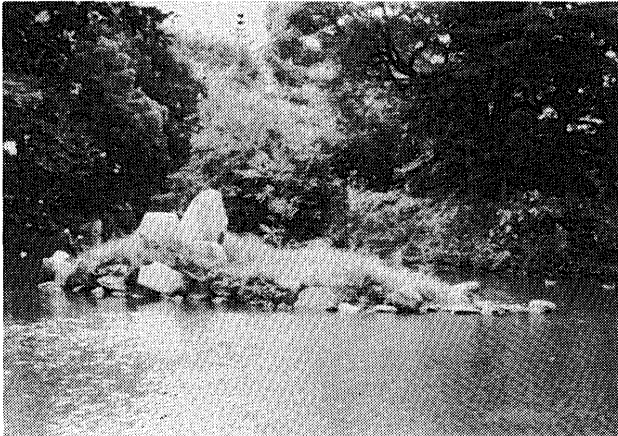
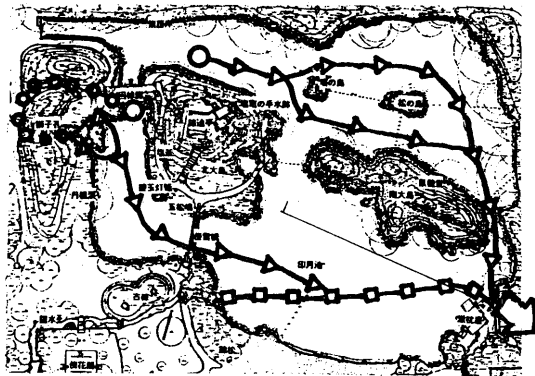


写真-1 松の島現況

④獅子孔の復元

明治期の水源の変更にもない高瀬川からの水の落し口が廃止された。廃止された2ヶ所の落し口のうちのひとつが「獅子孔」である。これは暗渠を通ってきた水が石組の真中の穴から湧き出しゆるやかに流れを下って池に注ぐもので、庭園内の見どころのひとつである。これをポンプアップにより復元することを提案している(190L/分)。水源の変更により池の水循環が悪くなり印月池の東半分の水質が悪化しやすくなっていることに対しても、水質浄化の効果が期待できる。この目的のためには回棹楼東側にもう一基ポンプを設置することが望ましい(230L/分)。



⇒排水口

○ ポンプの位置 -□- 現状の主な水の流れ

。。。パイプによる導水 -▽- 計画される循環

図-3 獅子孔復元および池水の水循環計画

3. おわりに

以上報告してきた通り、約30年間の管理業務を経てなお渉成園の景観の保全および復元の試みはこれからの感が強い。もちろん庭園に完成はありえないであろう。

ところで南大島の樹木の管理についてであるが、ここも創設時から江戸時代中期までは松島であったので、やはり松島として復元す

ることが本筋と思われる。ところが頼山陽が「渉成園十三景」にうたう南大島(臥龍堂)の姿にむしろ今日の状態に近いのであれば、松島の復元はこの「渉成園十三景」の趣を破壊することになりかねない。また、大木を取り除くことにより外部の高層マンションが丸見えになる恐れもある。このように長い時を越えて観賞され守り抜かれてきた文化財庭園は、保全および復元にあたり時計の針をいつの時点にあわせるかで目標とする景観像が大きく異なってくるのがわかる。当面は現状維持としている。

今後ともより美しく、訪れる人に愛される渉成園を後世に伝えるべく努力をしたい。

参考文献

- 1) 森蘊(1952): 東本願寺別業渉成園について: 大和文華(8)
- 2) 村岡正(1954): 枳殻御殿古之記について: 造園雑誌 20(2)
- 3) 村岡正(1955): 渉成園の古絵図と枳殻邸安政度総図について: 造園雑誌 21(1)
- 4) 市古夏生, 鈴木健一校訂(1999): 新訂 都名所図会 1: 筑摩書房
- 5) 重森三玲, 重森完途(1974): 日本庭園史体系(2): 社会思想社
- 6) 直川健一(1962): 名園を訪ねて14 渉成園: 日本庭園(25): 庭園刊行会
- 7) 中根史郎(1997): 渉成園の庭園: 渉成園その意匠と美: 真宗大谷派(東本願寺)
- 8) 加藤彌寿雄(1996): 渉成園手水鉢について: 環翠: 植彌加藤造園株式会社
- 9) 加藤彌寿雄(1996): 渉成園の礎石: 環翠: 植彌加藤造園株式会社
- 10) 加藤彌寿雄(1999): 東本願寺の石造美術品: 環翠(5): 植彌加藤造園株式会社
- 11) 加藤彌寿雄(2000): 渉成園の庭: 真宗 1153(4): 東本願寺
- 12) 植彌加藤造園株式会社(1999): より美しく渉成園: 東本願寺への提案書

名称: 渉成園(枳殻邸)

所在地: 京都市下京区下珠数屋町通間之町東入

発注: 真宗大谷派(東本願寺)

規模: 35,200 m²

施工期間: 1967年より年間管理

施工: 植彌加藤造園株式会社